

# 第1回 日本リンパ浮腫治療学会四国地方会

「リンパ浮腫複合的治療料」の保険収載から1年を経過して

～リンパ浮腫の治療環境に変化は？～

2017年6月17日（土） 13:40～18:00

（受付開始時間：8:30）

会場：THE GRAND PALACE TOKUSHIMA

3F グラントルーム



# プログラム

13:40～13:45 ◆開会挨拶 四国リンパ浮腫治療学会四国地方会 代表世話人  
社会医療法人真泉会 今治第一病院 名誉院長 加藤 逸夫

13:45～15:15 ◆基調講演 司会：医療法人 リムズ徳島クリニック 院長 小川 佳宏  
「リンパ浮腫の外科的治療について（リンパ管蛍光造影のライブデモを含む）」  
演者：福岡赤十字病院 形成外科部長 濱田 裕一

15:15～15:25 休 憩

15:25～16:25 ◆シンポジウム 1「四国各県での複合的治療の現状と今後の課題」  
司会：高知大学医学部 外科学（外科二）講座教授 渡橋 和政  
演者・愛媛県：四国がんセンター リハビリテーション科 富永 律子  
・香川県：香川大学医学部附属病院 看護部 吉原 章子  
・徳島県：医療法人 リムズ徳島クリニック 看護師 高西 裕子  
・高知県：高知大学医学部附属病院 形成外科 栗山 元根

16:25～16:35 休 憩

16:35～17:35 ◆シンポジウム 2「各職種の特徴を生かした複合的治療の工夫」  
司会：四国がんセンター 特命副院長 形成外科 河村 進  
演者・看護師：人間環境大学 松山看護学部 准教授 大西 ゆかり  
・訪問・在宅看護：医療法人 かさまつ在宅クリニック 訪問看護部 長谷 康子  
・理学療法士：医療法人 リムズ徳島クリニック 理学療法士 森 祐介

17:35～17:55 ◆リンパ管蛍光造影の経時変化の確認

17:55～18:00 ◆閉会挨拶 当番世話人 医療法人 リムズ徳島クリニック 小川 佳宏

## 第 1 回日本リンパ浮腫治療学会四国地方会 抄録集の発刊に当たって

日本リンパ浮腫治療学会四国地方会 代表世話人  
社会医療法人真泉会 今治第一病院 名誉院長 加藤逸夫

四国四県でのリンパ浮腫標準治療のいっそうの啓発と普及を目的として、平成 20 年に「四国リンパ浮腫治療懇話会」を、加藤逸夫（愛媛）、河村進（愛媛）、田中嘉雄（香川）、小川佳宏（徳島）、松本康久（高知）の世話人で立ち上げ、松山市の四国がんセンターで第 1 回の懇話会を開催し、以後各県持ち回りで毎年一回の開催を続け、昨年の平成 28 年に第 9 回の懇話会が行われています。その後日本各地でも同様な研究会や懇話会が設立されています。

リンパ浮腫治療のゴールドスタンダードとされている複合的理学療法を行うセラピストの質の向上と担保を目的として、平成 24 年に関連 5 学会で構成された「リンパ浮腫療法士認定機構」が設立されました。同機構で認定されたリンパ浮腫療法士は、これまでに 900 名余になり、47 都道府県全てで活躍されるようになったこと、平成 28 年に不十分であるがリンパ浮腫に対する複合的治療の保険収載が認められ、機構が目標としていた公的保険によるリンパ浮腫治療の一端が開かれたことなどから、リンパ浮腫療法士認定機構は一定の役割を果たしたと考えられ、以後は、異なった診療科、コメディカルのいろいろな職種の人たちが、リンパ浮腫の治療に重要なチーム医療の進展を図って、一堂に会して十分な討議を行う場として、「日本リンパ浮腫治療学会」を設立し、そこでリンパ浮腫療法士の育成や認定なども、リンパ浮腫療法士認定機構の業務を継承して行うことになりました。

平成 28 年 9 月 24 日（土）第 1 回日本リンパ浮腫治療学会総会～リンパ浮腫治療の新たな幕開け～が、東京都で開催されております。本学会は、すでに各地にあるいくつかのリンパ浮腫治療懇話会、リンパ浮腫研究会などを統合して、本会の地方会あるいは支部会としてリンパ浮腫標準治療の全国展開を目指しています。四国リンパ浮腫治療懇話会も、世話人会で討議の上、本学会に参加することになり、本来第 10 回四国リンパ浮腫治療懇話会となる予定だったものが、今回、第 1 回日本リンパ浮腫治療学会四国支部会として、小川佳宏先

生のお世話で徳島市にて開催される運びとなった次第であります。そして学会として抄読集を作成することといたしました。

基調講演として、福岡赤十字病院の濱田裕一先生に「リンパ浮腫の外科的治療について」ご講演いただきますが、リンパ管蛍光造影を使用し、用手的リンパドレナージによって、リンパ液、組織間液がどのように移動するのかをライブデモしていただきます。

シンポジウム1では、「四国各県での複合的治療の現状と今後の課題」について各県の方にご発表いただき、シンポジウム2では「各職種の特徴を生かした複合的治療の工夫」の主題の下に、大学看護部教官である看護師により「看護師について」、在宅クリニック訪問看護部の訪問看護師により「訪問・在宅看護について」、クリニックの理学療法士により「理学療法士・作業療法士について」ご講演いただきます。ご講演はいずれも実地臨床上極めて有益なものであります。

第1回日本リンパ浮腫治療学会四国地方会でのご講演の抄読集の発刊に当たり、本学会設立の経緯についてご報告し、ご発表内容についてご紹介させていただきました。本学会を通して、四国四県にリンパ浮腫の標準治療がいつそう普及し、リンパ浮腫の患者様のよりよい生活に役立つことを心から願ってやみません。

## 第1回日本リンパ浮腫治療学会四国地方会を開催するにあたり

日本リンパ浮腫治療学会四国地方会 当番世話人  
医療法人 リムズ徳島クリニック 小川佳宏

このたび、第37回日本静脈学会総会が徳島で開催されることに合わせ、第1回日本リンパ浮腫治療学会四国地方会（以下「四国地方会」）を開催させていただき運びとなりました。

加藤逸夫先生のお話にもありましたが、「リンパ浮腫指導管理料」が保険収載された2008年に「四国リンパ浮腫治療懇話会」が発足し、四国各県の世話人の皆様のお力で講演会や市民公開講座が開催されました。「リンパ浮腫複合的治療料」が保険収載された2016年に「日本リンパ浮腫治療学会」が発足しましたが、この機会に「四国リンパ浮腫治療懇話会」から「四国地方会」に名称を変更し、今回が第1回の学術集会となります。「リンパ浮腫複合的治療料」は非常に期待が高かったのですが、実際は「診療報酬点数が低い」「施設基準が厳しい」など全国各地で普及する起爆剤には至らない状況です。そこで今回は、保険収載から1年を経過してリンパ浮腫の治療環境に変化があったかどうかをテーマといたしました。

基調講演をお願いした濱田裕一先生は、本年3月まで愛媛県立中央病院で「リンパ管-静脈吻合手術」を積極的に行われておりました。最先端の手術治療の紹介や、手術でリンパ浮腫患肢の状態を直接確認された先生ならではの知見をお教えいただければと思います。また直接目にする機会が少ないICGによる「リンパ管蛍光造影」をライブで見せていただけますので、リンパ浮腫患肢や健常肢での実際のリンパ流をぜひご確認ください。シンポジウム1では、今回のテーマであります「リンパ浮腫の治療環境に変化があったか？」を四国各県のリンパ浮腫診療に携わる施設からご報告いただきます。まだまだ普及が進まない「リンパ浮腫複合的治療料」の問題点についても議論できればと考えております。シンポジウム2では、複合的治療に従事できる職種「医師・看護師・理学療法士・作業療法士・マッサージ師」のうち、「看護師」「訪問看護認定看護師」「理学療法士」から現在の職種ならではのリンパ浮腫治療の工夫をお話しいたします。

今回は1回目ということで演題募集は行いませんでしたが、次回以降は一般演題や要望演題も募集して、リンパ浮腫治療について議論できる場になればと考えています。今後ホームページを作成する予定ですが、本抄録集の最後に四国地方会の会則案を載せておりますのでご確認ください。

本地方会が新しい知識を身につけ、諸問題を議論できる場になりますことを祈念しております。

## リンパ浮腫の外科的治療について

福岡赤十字病院 形成外科 浜田裕一

愛媛県立中央病院 形成外科 石野 憲太郎、小林 一夫、中川 浩志

リンパ浮腫に対する外科的治療の分野はここ 10 余年で大きく変化し、進歩した領域です。自験例の中にも圧迫などの保存的治療から完全に脱却できた方や難渋する反復性蜂窩織炎が緩解した方もいます。厳密な保存的治療の遂行・継続が困難な小児や麻痺を有する方においても保存的治療とは異なるアプローチで成果を挙げています。しかし外科的治療単独の効果は非常に大きいものから微なものまでみられ、まだまだ発展途上の分野と考えています。

今回の「リンパ浮腫の外科治療」では外科的治療の歴史に始まり、試験的で先鋭的な将来を見据えた治療までご紹介したいと考えています。これまでの多くの臨床経験から、各手術法の特徴、効果や欠点など解説します。次項のライブデモとも関連しますがリンパ管 ICG 蛍光造影に代表される様々な modality の進歩が浮腫病態の理解に役立っており、それらをどのように手術に活かすかだけでなく、保存的治療との関連性も紹介します。大分大学の三浦真弘先生の協力でリンパ管周囲微小構造変化を通じた病態検索を継続していますが、最近では研究成果を手術に反映させ、短時間の手術でより高い効果を得られるように病態分類・標準化が進んできました。症例や術中ビデオを供覧しながら解説いたします。

愛媛県立中央病院形成外科、福岡赤十字病院、九州リンパセンターをはじめとした四国・九州広域でのリンパ外科への取り組みもご紹介いたします。

簡便かつ継時的にリンパ動態を検索可能なリンパ管 ICG 蛍光造影法は外科医の間では広く行われており、欠点もありますが総合的に見て他に比肩する方法はないのが現状です。今回、リンパ浮腫可視化と保存的治療への臨床応用、圧迫下リンパ動態の可視化などを主眼にライブデモを予定しています。経験豊富なリンパ浮腫セラピストである佐藤佳代子先生、高西裕子先生両氏の協力のもとリンパ管 ICG 蛍光造影の実際を紹介する予定です。

## 愛媛県における複合的治療の現状と今後の課題

富永律子<sup>1)</sup> 明崎禎輝<sup>1)</sup> 河村進<sup>2)</sup> 山下昌宏<sup>2)</sup> 藤田悟志 佐伯光子<sup>3)</sup> 山下佐智子<sup>3)</sup> 中岡加代子<sup>3)</sup> 宮松菊美<sup>3)</sup> 水木恵子<sup>3)</sup> 川口由美子<sup>3)</sup>

四国がんセンター リハビリテーション科<sup>1)</sup> 形成外科<sup>2)</sup> 看護部<sup>3)</sup>

愛媛県では2000年に四国中央病院でリンパ浮腫診療をはじめ開設されて以来、徐々に診療施設が増えてはいる。しかし調べ得た限りではあるが、現在リンパ浮腫外来を開設している施設は4施設である。その中で複合的治療料を算定している施設は無い。この主な原因としては、複合的治療料が算定できる施設基準を満たす施設が少ないこと、基準を満たしたとしても治療回数に制限があり長期の継続した治療が難しい、私費診療に頼らざるを得ないなどが考えられる。

また、日本リンパ浮腫治療学会認定のリンパ浮腫療法士は、より高度な専門知識・技術水準を有した専門家の位置づけであるが、その資格者の在籍施設も4施設と少なく今後の十分な充足が求められる。

四国がんセンターでのリンパ浮腫診療は、2004年よりリンパ浮腫外来、2011年より自費診療でのリンパ浮腫ケア外来を開設、2014年4月より入院による集中排液治療を行っている。当院での集中排液治療はリンパ浮腫療法士が多職種で実施しており、効果を認めている。

愛媛県の実情と当院の現状等を踏まえ、今後の愛媛県における診療状況の課題を検討する。

## 香川大学医学部附属病院における複合的治療の現状

香川大学医学部附属病院 看護部

吉原章子

香川大学医学部附属病院は、県内唯一の大学病院、特定機能病院として、地域の診療連携拠点を担う、急性期病院である。

昨年、リンパ浮腫複合的治療料が保険収載され、算定に関する検討会をもったが、施設基準を満たすことができず、現在に至っている。そのため、院内で行われるリンパ浮腫治療は、予防指導、外科的治療、私費診療、その他相談対応である。

私費診療であるリンパ浮腫ケア看護外来は、2008年に開設し、毎週金曜日にリンパ浮腫療法士2名が6枠で担当している。形成外科、乳腺外科、女性診療科にそれぞれ担当医師をもち、保険診療で診断されたのち、紹介されるシステムとなっている。2回目以降は、看護外来で予約取得しているが、必要と判断した場合は、医師の保険診療への変更を依頼することもある。看護外来では、リンパ浮腫の複合的治療とセルフケア支援を実施しているが、入院、外来を問わず、浮腫に関する相談を受けることもあり、金曜日に限らず、組織横断的に対応している。

香川大学医学部附属病院におけるリンパ浮腫治療の課題として、予防指導の徹底、複合的治療の施設基準、発症時の対応、緩和ケアの提供、炎症時の対応、長期的なフォローアップ、地域連携などがある。今後は、地域でリンパ浮腫患者さんを支えるネットワークづくりが重要であると考えます。



## 徳島県における複合的治療の現状と今後の課題

高西裕子<sup>1)</sup> 上田亨<sup>1)</sup> 森祐介<sup>1)</sup> 大久保真由美<sup>1)</sup> 郡利江<sup>2)</sup> 三木恵美<sup>2)</sup> 今井芳枝<sup>3)</sup> 吉野牧子<sup>4)</sup>  
長谷康子<sup>5)</sup> 町田美佳<sup>6)</sup> 小川佳宏<sup>1)</sup>  
医療法人リムズ徳島クリニック<sup>1)</sup> 徳島県立中央病院<sup>2)</sup> 徳島大学大学院医歯薬学部研究部<sup>3)</sup>  
あおぞら内科訪問看護ステーション<sup>4)</sup> かさまつ在宅クリニック<sup>5)</sup> 徳島赤十字病院<sup>6)</sup>

平成 28 年度診療報酬改定においてリンパ浮腫複合的治療料が新設され保険治療が可能となったが、診療報酬を算定するための施設基準のハードルが非常に高いことが知られている。徳島県においても昨年度の改定時にこの基準を満たす医療施設はなく、リンパ浮腫複合的治療料を算定するためには施設基準として求められるリンパ浮腫の複合的治療について適切な研修を受けた医師、医療スタッフの養成と、リンパ浮腫指導管理料を年間 50 回以上算定することへの対策が必要であった。また、県内のがん拠点病院とはじめとするがん診療施設でのリンパ浮腫への対応は、主治医とがん関連の認定看護師やがん専門看護師が窓口となり初期治療の対応を行い、重症化の兆候がみられる場合にはリンパ浮腫専門治療施設へ紹介をする形で対応をしていたが、リンパ浮腫に関する専門的な知識を有するセラピストの数は不足した状態であった。

徳島県では平成 19 年よりがん診療連携協議会の主催により、リンパ浮腫の基本的な知識と技術を学ぶ「リンパ浮腫研修会」を開催してきた。平成 27 年からはリンパ浮腫についてより専門的に学びたい有志によりリンパ浮腫勉強会を発足させ、厚生労働省後援「新リンパ浮腫研修」が示した「専門的なリンパ浮腫研修に関する教育要綱」の要件を満たす内容で研修会を行っている。昨年度の診療報酬改定をきっかけに、本研修会を診療報酬算定に必要な要件を満たすセラピストを養成する研修会として、四国厚生支局に申請したところ、「当該研修は、リンパ浮腫の施設基準に該当すると認めます」との回答を頂いた。そのことにより、大学教員、県内のがん専門看護師、緩和ケア・訪問看護認定看護師の 6 名リンパ浮腫セラピストが県内で新たに誕生し、それぞれの職場においてリンパ浮腫や終末期の浮腫のケアに積極的に関わり、活動を開始している。

今後はリンパ浮腫の発症予防・早期発見、重症化した際の専門的な治療、治療後のアフターフォロー、また、がん終末期や高齢で通院が困難な症例においても在宅で浮腫のケア受けられるように、県内の医療施設が連携して行っていくことを目標とするとともに、リンパ浮腫複合的治療料の算定については、その前提条件である「リンパ浮腫指導管理料を、年間 50 回算定する」というハードルをどのようにクリアしていくかについて検討していく必要がある。

## 高知県におけるリンパ浮腫治療の現状と課題

栗山元根<sup>1)</sup>、岩井奈都子<sup>1)</sup>、沖豊和<sup>2)</sup>、小松由香<sup>3)</sup>、渡橋和政<sup>1)</sup>

高知大学医学部附属病院 形成外科<sup>1)</sup>、乳腺センター<sup>2)</sup>、看護部<sup>3)</sup>

平成 28 年度は、リンパ浮腫複合的治療の保険収載がなされたことにより、リンパ浮腫に悩む患者のみならず治療に関わる医療関係者にとってもリンパ浮腫治療の幕開けとなった。そこで、現時点での高知県におけるリンパ浮腫治療に関する現状と課題について報告する。

現時点で当院で把握している「リンパ浮腫治療」を行っている高知県内 14 施設にアンケート用紙を送付して回答を得た。また、回答の得られなかった施設については、H27 年時点で把握出来ている項目についてデータを加えた。回答の得られた施設のうち、平成 28 年 4 月時点で「リンパ浮腫複合的治療」の施設認定を受けているのは高知大学の 1 施設のみであり、施設認定のハードルの高さが窺われた。殆どの施設では施設認定の予定すら無い状況であり、その理由としては医師、看護師、理学・作業療法士などの有資格者の不在が最も多かった。治療内容としては、スキンケア、用手的リンパドレナージ、弾性着衣・弾性包帯による圧迫療法、セルフケア指導などを行っている施設が多く、運動療法や手術療法を行っている施設は少なかった。外来でのリンパ浮腫治療に関しては、原疾患の診察料のみの算定が多く、リンパ浮腫治療に関して正しく保険算定出来ている施設が少なく、患者数が少ない事、算定料が低い事なども合わせて、収益性が悪いことがリンパ浮腫治療施設が増加しない問題の一つとして考えられた。また、既存のリンパ浮腫治療の有効性に関する疑問を指摘する意見もみられた。

高知県における「リンパ浮腫複合的治療」に関する問題点としては、①算定料が安い割に患者数が少ない、②資格取得のハードルが高く、施設認定が難しい、③リンパ浮腫治療を行っている施設や診療科の情報が少ない、④施設間の連携が難しいなどが挙げられた。今後、これらの課題について各施設で解決法を模索するとともに、リンパ浮腫治療に関する中核施設を設置して情報共有や治療連携を図るなどの必要性を感じた。

## 看護師の特徴を生かした複合的治療の工夫

人間環境大学 松山看護学部 大西 ゆかり

リンパ浮腫は、がん治療による後遺症と位置付けられ、がん治療を受けた時から生涯にわたりがんサバイバーの生活に様々な影響をもたらすことが問題となっている。

看護師が実践するリンパ浮腫ケアにおいて、2008年のリンパ浮腫指導管理料施行後、医師の指示により看護師免許を有する者であれば、経験年数や研修参加の有無を問わず加算できるようになり、リンパ浮腫の予防指導は普及してきたといえる。2016年にリンパ浮腫の複合的治療料が施行されたが、算定要件や施設基準を満たす施設は少数であり、多くの施設でリンパ浮腫ケアに困難をきたしている。

このような中で、リンパ浮腫ケアに携わっている看護師は、複合的治療を基盤に様々な看護実践に取り組んでいる。そこで、看護研究を概観することによって、リンパ浮腫発症のリスクがある患者、リンパ浮腫と共に生きる患者に対して、複合的治療を推進する上で看護師がどのような役割を担い、どのような課題をもっているのか検討したので報告する。そして、急性期医療の枠組みの中で提供される複合的治療の今後の発展につなげたい。

## 訪問看護師が行うリンパ浮腫ケアの実際

### —熟練したリンパ浮腫セラピストとビギナーズセラピストとの連携—

医療法人 かさまつ在宅クリニック

訪問看護部 訪問看護認定看護師 長谷 康子

がんの治療後におこるリンパ浮腫の悪化予防には、継続的かつ複合的な治療を行うことが大切である。このため患者は、日常的に圧迫や運動療法等のセルフケアを行い、また、リンパ浮腫が過度に増悪しないために、早期に皮膚の状態の異常に気付くことが重要である。しかし、患者の中には高齢者も多く、独居や高齢夫婦のみで暮らし家族の協力が得られにくい等、セルフケアや異常の早期発見が困難な場合も多い。「浮腫が悪化し入院してよくなったが、家に帰るとすぐ悪くなった」また、「病院に来た時には非常に悪くなっていた」等、症状の悪化や入退院を繰り返し、患者の生活の質が低下する要因となっている。

これらの背景には、リンパ浮腫患者の治療やケアを行う専門的な病院やセラピストの数に限りがあり、患者が十分な支援が受けられないこともある。在宅で活動する訪問看護師も同様に、専門的なケアを提供できる人材は少ない。木村（2010年）は、訪問看護師は浮腫のケアの重要性を強く認識しているが、実践や評価に自信がなく、学習の機会も少ないと感じていると報告している。在宅でリンパ浮腫患者に支援が必要になった時、訪問看護師は生活の場に入りこみ、細やかで個別的なケアを提供できるという自分達の強みや役割を自覚しながらも、知識や技術の未熟さに悩む。さらに訪問時に一人で判断して実践するという訪問看護ならではの特殊性が、ケアの困難さをより感じさせると考える。

筆者も、様々な要因で浮腫をきたした患者の訪問看護を経験し、ケアの重要性と困難さを感じていた。そして浮腫ケアについて学び、技術を習得したいと考え、リンパ浮腫のセラピスト養成講座を受講した。その後、リンパ浮腫患者の訪問看護を行ったが、受講前とは違った技術の手ごたえを感じながらも、同時に判断に悩むことが多くあった。そのような時、専門病院の医師や熟練したセラピストである看護師と連携することで、多くの学びを得ることができた。

本シンポジウムでは、熟練したセラピストとの連携により患者の症状が改善し、また、筆者である訪問看護師がリンパ浮腫のケアを継続的に行うことが出来た事例を紹介する。そして、筆者は、専門病院などの熟練したセラピストと連携することの重要性を強く感じた。リンパ浮腫の患者を目の前にして判断に悩む場合や、どのような手技が効果的なのか等を相談できるセラピストとの連携には、どのような手段があるのか、高齢で家族の支援が得られない患者や浮腫が強く移動が困難な患者が、訪問看護師等によって生活の場で継続的にケアを受けられるような体制づくりに向けて、皆様と一緒に考えたい。

## リンパ浮腫治療における運動療法の意義について

森 祐介<sup>1)</sup>、上田 亨<sup>1)</sup>、小川 佳宏

医療法人 リムズ徳島クリニック 理学療法士<sup>1)</sup>

現在のリンパ浮腫治療では、リンパ管-静脈吻合術などの外科的治療が全国的に行われ始めており、高い治療効果が報告されているケースもみられる。しかし、外科的治療でのリンパ浮腫の根治は困難で、症状改善や悪化予防には依然として保存的治療（複合的治療）が必要不可欠であり、各医療機関では保存的治療をベースとしてそれぞれの診療状況や立場に合わせた関わりが持たれている。当院においても保存的治療を中心に、入院での集中治療と外来での維持治療を行っており、医師、看護師、理学療法士、マッサージ師がそれぞれの立場からリンパ浮腫治療に携わっている。

理学療法士としてリンパ浮腫治療に関わる中で、リンパ浮腫の悪化から患肢の体積増加や皮膚硬化による関節可動域制限など運動器への影響がみられ、それにより歩行やしやがみ動作、家事などの動作が困難となりADLやQOLの低下につながることも多くみられる。また、重症例では長期間の不動による関節拘縮や筋力低下、左右のバランスが崩れた不良姿勢や歩容の悪化などによる骨格の歪み、膝や腰などの痛みといった二次的な障害が起これ、さらにリンパ浮腫の悪化を助長するといった悪循環に陥ることも少なくない。複合的治療における運動療法は筋ポンプによるリンパ・静脈環流の促進が主な目的であり、症状改善に大きな役割を担っている。しかし運動機能が低下した状態では、十分な効果が得られにくいことや運動を行うこと自体が困難になることも考えられる。このことから、発症早期など運動機能の低下が起こっていない時期では予防的な観点での運動療法を、運動機能が低下した重症例などではリンパ浮腫改善と運動機能の改善を兼ねた治療的な観点での運動療法をとった専門的な視点での介入が必要だと考えられる。

リンパ浮腫診療ガイドラインやリンパ浮腫関連の書籍においても運動療法は重要な位置づけであると考えられているが、その種類、時間、期間などに標準化された指針はないとされている。リンパ浮腫の重症度や年齢、運動能力などの条件がそれぞれ異なるため、すべてのリンパ浮腫患者に対する運動療法の画一化は困難であり、個別的な運動プログラムが必要となる。その中で、理学療法士の視点から運動療法の意義や注意点、介入方法などを紹介する。

# 日本リンパ浮腫治療学会四国地方会会則（案）抜粋

第一条（名称） 本会は、日本リンパ浮腫治療学会四国地方会（以下四国地方会）と称する。

第二条（目的） 本会は、リンパ浮腫治療に関する情報を社会に広め、四国地方におけるリンパ浮腫患者の受入れ体制の構築、リンパ浮腫治療の進歩と健全な発展を図ることを目的とする。

第三条（事業） 本会は、第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1) 四国地方会世話人会を年1回以上開催する
- 2) リンパ浮腫治療に関する情報の交換
- 3) リンパ浮腫患者の受入れ体制確立への協力
- 4) 四国地方会の学術集会や公開セミナーを年1回以上開催する
- 5) その他必要な活動

第四条（組織） 本会の組織は、次の通りとし、その詳細は別紙に定める。

- 1) 会員 本会の目的に賛同し、リンパ浮腫治療に従事あるいは関心を持つ医療従事者で、**日本リンパ浮腫治療学会員**であるもの。
- 2) 世話人および世話人会
  - ①本会には、代表世話人1名および世話人若干名をおき、これらをもって、本会の円滑な運営を目的として、世話人会を構成する。
  - ②代表世話人は、世話人会より委嘱され、本会を代表し会務を統括する。
  - ③世話人会は、その互選により、当番世話人1名を選任する。  
当番世話人は、四国地方会世話人会並びに学術集会を開催する。
  - ④代表世話人および世話人の任期は、2年間とし、重任および再任をさまたげない。
- 3) 会計
  - ①会計監事1名をおき、本年の経理を監査する。
  - ②会計監事の任期は、2年間とし、重任および再任をさまたげない。
- 4) 事務局 本会の事務局は、各世話人施設で5年ごとの持ち回りとする。
- 5) HP作成・更新 HPの作成・更新に関しては世話人会で決定する。

第五条（運営）

- 1) 本会は、参加会費・寄付金・その他の収入によって運営される。
- 2) 会計担当者は世話人会において会計報告を行い、世話人会の承認を受けなければならない。
- 3) 会計年度は、毎年4月1日より始まり、3月31日に終わることとする。
- 4) 本会の継続の可否を5年後に検討することとする。

## 組織

### 1. 代表世話人

社会医療法人真泉会 今治第一病院 名誉院長 加藤逸夫

### 2. 世話人

独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター 特命副院長 形成外科 河村 進

独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター 乳腺外科 清藤 佐知子

人間環境大学 松山看護学部 准教授 大西 ゆかり

香川大学医学部 形成外科教授 永竿智久

医療法人 リムズ徳島クリニック 院長 小川佳宏

高知大学医学部 外科学外科2講座教授 渡橋和政

### 3. 会計監事

未定

### 4. 事務局

医療法人 リムズ徳島クリニック

〒770-0047 徳島県徳島市名東町 2-559-1

Tel : 088-634-1122

Fax : 088-634-1630